

伝えたい

戦後80年 過去から未来

伝えたい記憶と言葉

三輪郁子さん 83

諏訪市大和

今年は太平洋戦争終戦八十年
終戦日は昭和二十年八月十五日
私の父の戦死の命日は終戦一ヶ月
前の昭和二十年七月十日である。

三十五歳を一期とした生涯だった。
父が出征した昭和十七年八月は
私は生後五ヶ月でした。「出征の
朝このもみじの木の下でだっし
てね」と叔母に聞かされた。私は
八十三歳になったが今だ一度も父
の夢を見たことがない。お父さん
が出征した日、子供はお母さん
のお腹の内という話も沢山聞いて来
たが何しろ記憶はなにもない。

手元に有る当時の記録によると
父死亡が昭和二十二年八月付で届
いている。渡された白木の十五セ
ンチ四方くらいの箱の中に、四つ
に疊んだ告知書と白い紙包みが有
った。母が静かに開くと、包みの中



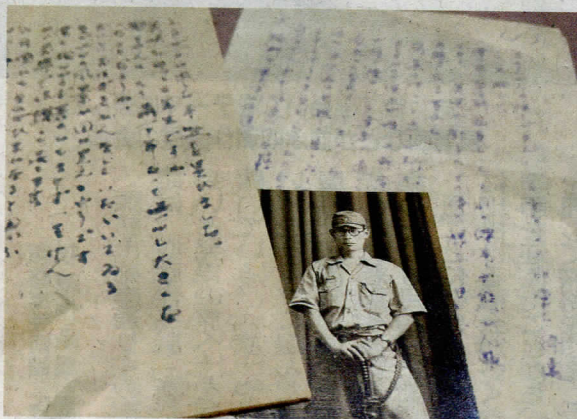
母親と写真に納まる三
輪さん(1〜2歳)

戦地からの父の便り

には丸い小さな赤茶色の土の玉が
数個入っていた。紙の上でコロコ
ロと転がって落ちそうになった。
口と転がって落ちそうになった。
「こんな姿になっちゃって。こん
なことで(私も子供も)分る訳な
いじゃないの」と悲しみとも怒
りともつかぬ上擦った声を今も忘
れられない。この父の無言の帰宅
が唯一現実の父の記憶だ。

母は私達姉妹と居る時又近所の
方、父の職場の方、親戚の何方に
会っても涙の会話が止らなかった。
母の膝から母を見上げ涙で途切れ
途切れになる会話をひどく長く感
じたものだ。

母は私達姉妹へ病弱な体を押し
て花見、花火、摘み草、きのこ採
り等楽しませ慈しんでくれた。母
は五十一歳で父の元へ旅立った。
熱い南国フィリピンから故郷の



フィリピン・マニラで撮影された
三輪さんの父と、家族への思いを
つづり出征先から送られた手紙
1942〜43(昭和17〜18)年ごろ



三輪さんが父親をしのんで霧ヶ峰の風景を
日本画(50号)に描いた「高原の雪景」

景色を懐しみ美しい雪景色等望郷
の想いを母へ送っている。私は父を

偲び霧ヶ峰の雪原等の絵を描いた。
父の戦中。母の戦後。いずれ私
はあの世とやらで父母に逢う。三
十五歳の青年父は八十歳越えの娘
へ何をどう語ってくれるだろうか。
※原文を尊重して掲載しました。